

名詞の意味と修飾における役割

要旨

日本語には、2つの名詞を「の」でつないで「NのN」とする修飾表現が存在する。この「NのN」は、「ネコの車」のように一見直接は関係が無いような2つの名詞によって構成されたり、「ソシユールの授業」のように1つの「NのN」にも多様な解釈が存在するなど、名詞の組み合わせや解釈の自由度が非常に高い表現である。しかし、そのような特徴をもつ「NのN」にも、「??値段の商品」、「??大きさの靴」のように明らかに容認不可能となるパターンが存在する。本論文では、上山 (2011, 印刷中) によって提案される linguistic SR の表記法を用いて、容認不可能となる例やその他のさまざまな「NのN」を分析し、「N₁のN₂」において、(i) 修飾部 N₁の位置に attribute に相当する v_n型の表現はあらわれないことができない、そして、(ii) 主要部 N₂の位置に p_n型の表現はあらわれないことができない、という2つの制約があることを明らかにした。また、本論文では「Adj+NのN」という構文の場合の意味解釈に関して、上山 (2011, 印刷中) では定義されていなかった新しい推論規則を提案した。

言語学・応用言語学専門分野
2008 (平成 20) 年入学
1LT08134R
民部絃一
2012 (平成 24) 年 1 月提出

1. はじめに	1
1.1. 「N の N」の特徴	1
1.2. 問題となる「N の N」	2
1.3. 西山 (2003) による「N の N」の分類	3
2. linguistic SR の導入	6
2.1. SR 式の 4 つのタイプ	6
2.2. 修飾関係	9
3. 主張	13
4. 問題となる例の考察	14
4.1. 「??値段の商品」と主張の(35)	14
4.2. 「お手頃な値段の商品」と主張の(37)	15
4.3. 「お手頃な値段の商品」と「象は鼻が長い」	22
4.4. 「??ドアの自動」と主張の(36)	24
4.4.1. v_n の p_n	24
4.4.2. x_n の p_n	25
4.4.3. e_n の p_n	25
4.4.4. p_n の p_n	26
5. さまざまなパターンの「N の N」の考察	27
5.1. 容認不可能となる「N の N」 : $N_1=v_n$ の場合	27
5.2. 容認不可能となる「N の N」 : $N_2=p_n$ の場合	27
5.3. 容認可能となる「N の N」	27
5.3.1. x_n の x_n	27
5.3.2. x_n の e_n	28
5.3.3. x_n の v_n	29
5.3.4. e_n の x_n	29
5.3.5. e_n の e_n	30
5.3.6. e_n の v_n	30
5.3.7. p_n の x_n	31
5.3.8. p_n の e_n	32
5.3.9. p_n の v_n	33

6. まとめ	34
参考文献	36

1. はじめに

1.1. 「NのN」の特徴

日本語の修飾表現には、2つの名詞を「の」でつないで「NのN」とする表現が存在する。この「NのN」という表現は、(1)で見られるような、一見直接は関係が無いような2つの名詞の組み合わせについて用いられ、また1つの表現の中にも多様な解釈が存在したりするなど、用途の幅が広く、名詞の組み合わせの自由度が非常に高い表現であるといえる。

- (1) a. 太郎の授業
- b. ペットボトルの犬
- c. ジョンのメアリ
- d. 太郎の電車

[西山 1993: 65]

(1a)の「太郎の授業」という表現においては、「太郎が生徒として受けている授業」、あるいは「太郎が教師として教えている授業」という解釈が存在し、さらに場合によっては「生徒である太郎が、毎回主役となって目立つ授業」という解釈も可能となるなど、実に多様な解釈の選択肢が存在する。また(1b)のような表現における2つのNは一見つながりが無いようにも思えるにもかかわらず、解釈としては、「ペットボトルのラベルに描かれた犬」、「ペットボトルで作られた模型の犬」、「ペットボトルが大好きなことで有名な犬」などの解釈が考えられる。(1c)のように2つの固有名詞によって構成される「NのN」も、「ジョンの恋人であるメアリ」、「ジョンが憧れの人物であるメアリ」、「ジョンの教え子であるメアリ」、あるいは「ジョンの飼い猫であるメアリ」などのさまざまな解釈が存在する。(1c)のような表現は、その関係性を知らない人にとっては意図された意味を正確に解釈するのは難しい。しかしそれでも、「ジョン」と「メアリ」という2つの名詞の間に何らかの関係性があることは明確であり、表現自体も違和感なく容認される。このような「NのN」の特徴は先行研究でも示されている。西山(1993)では、(4)の例は「太郎が乗っている電車」、「太郎が設計・製造した電車」、「太郎が車掌をつとめている電車」などコンテキスト次第で無限に多様な解釈ができるとし、またこの表現の言語的意味は「太郎とある種の間接関係をもった電車」以上のものではないとしている。

「NのN」という表現の組み合わせの自由度の高さについては、「NのN」の前後の名詞を入れ替えてみることでわかる。

- (2) a. 鳥の絵
- b. 絵の鳥

- (3) a. 太郎の友達
- b. 友達の太郎

(2a)は「鳥を表現してある絵」で、(2b)は「絵で表現した鳥」あるいは「絵の中にいる鳥」などの解釈、そして(3a)は「太郎と友達関係にある人物」で(3b)は「ある人物にとっての友達である太郎」といったように、意味解釈の違いはあるものの、「NのN」という表現自体は、2つのNを入れ替えても、意味の通じる容認可能なものである。これらの例からもわかるように、「NのN」は非常にさまざまな名詞の種類や組み合わせに対して用いられる表現であり、また同時に非常に豊かな解釈の可能性をもつということがいえる。

1.2. 問題となる「NのN」

1.1節において、「NのN」はあらゆる名詞の組み合わせによって構成されると述べているが、その中でも、(4)、(5)、(6)、(7)のような容認不可能な「NのN」の表現が存在する。

- (4) ??値段の商品
- (5) ??大きさの靴
- (6) ??規模の大会
- (7) ??ドアの自動

(4)、(5)、(6)、(7)はいずれも、意味の伝わらない表現である。(1)~(3)で見てきたような例では、一見関係が無さそうな2つの名詞に関しても、「NのN」という表現においてはさまざまな解釈の可能性が存在していた。その一方で、(4)の例においては、「商品」と「値段」という密接に関係をもっている名詞の組み合わせであるにも関わらず、「??値段の商品」という名詞句にすると意味が伝わらなくなる。(4)、(5)、(6)、(7)のような例は、これまで見てきたように、組み合わせの自由度の高い「NのN」という表現の中にあっては珍しいものであるといえる。そしてそのことは、「NのN」を構成する2つのN自体の持つ機能や特性、それに2つのNの位置関係などに何らかの制約がある可能性を示唆している。そこで本論文では、「NのN」という表現について以下のような問題を提起する。

(8) 問題提起

さまざまな組み合わせに対して用いられ、あらゆる表現が容認可能となる「Nの

N」において、「??値段の商品」や「??ドアの自動」のような容認不可能な表現が存在するのはなぜか。

以下では、(8)の問題に対して、「NのN」における2つの名詞のもつ意味、機能に着目して考察をおこなっていく。

1.3. 西山 (2003) による「NのN」の分類

「NのN」という表現については、これまでもさまざまな研究が行われている。益岡・田窪 (1992) や庵 et al. (2000) では、それぞれさまざまな「NのN」の例を挙げ分類を行っている。しかしこれらの分類は、修飾関係において「の」があらわしている意味によるものが中心である。その一方で西山 (2003) では、より「NのN」におけるそれぞれのNに着目した分類が行われており、「NのN」のパターンによって次の5つのタイプに分類されている。

- (9) a. タイプ A : NP₁ と関係 R を有する NP₂
- b. タイプ B : NP₁ デアル NP₂
- c. タイプ C : 時間領域 NP₁ における、NP₂ の指示対象の断片の固定
- d. タイプ D : 非飽和名詞 NP₂ とパラメータの値 NP₁
- e. タイプ E : 行為名詞句 NP₂ と項 NP₁

以下の(10)~(14)はそれぞれのタイプの例であり、それぞれ(9)の特徴をもっている。

- (10) タイプ A
 - a. 洋子の首飾り [西山 2003: 16 (28)]
 - b. 北海道の俳優 [西山 2003: 16 (29)]
- (11) タイプ B
 - a. コレラ患者の大学生 [西山 2003: 19 (36)]
 - b. 北海道出身の俳優 [西山 2003: 19 (38)]
- (12) タイプ C
 - a. 東京オリンピック当時の君 [西山 2003: 31 (76)]
 - b. 大正末期の東京 [西山 2003: 31 (78)]
- (13) タイプ D

- a. 第 14 回シヨパン・コンクールの優勝者 [西山 2003: 33 (85)]
- b. 『源氏物語』の作者 [西山 2003: 33 (88)]

- (14) タイプ E
 - a. 物理学の研究 [西山 2003: 40 (110)]
 - b. 予算の削減 [西山 2003: 40 (118)]

西山 (2003) によれば、タイプ A とは、前後の名詞の関係性について、NP₁ と関係 R を有する NP₂ と解釈するものであり、スロット R の値はコンテキストのなかで語用論的に補われる。たとえば(10a)の場合、もっとも一般的な解釈は「洋子が所有する首飾り」であるだろうが、コンテキストによっては「洋子が作った首飾り」や「洋子が欲しがっている首飾り」と解釈される可能性は十分にある。つまり、これらの例において関係 R というものは語用論的にいくらかでも設定することが可能であり、これまで「NのN」の特徴として示したように、このような例は「NのN」の多義性や表現の幅の広さをあらわしているといえる。また西山 (2003) の分類を参考にすると、本論文で問題となっている(4)から(6)の名詞句はタイプ D と同様の関係にあることがわかる。つまり、(4)から(6)の例における「値段」「大きさ」「規模」という名詞は、西山 (2003) の指摘する「非飽和名詞」であり、これらは「Xの」というパラメータの値が定まらないかぎり、それ単独では外延を決めることができず、意味的に充足していない名詞である。たとえば「値段」を例にした場合、「Xの」というパラメータの値が定まらないかぎり「値段」が何についての「値段」を指しているのかはわからない。そのため「何についての値段か」ということが言及されていない場合、「値段が高いですか?」といった表現も、指示する物がわからないために判断ができないということになる。ただ、(13)のような西山 (2003) による非飽和名詞の例では、前後のNを入れ替えた場合にも意味の通じる表現となる。

- (15) a. この芝居の主役
- b. 主役のこの芝居
- (16) a. 『源氏物語』の作者
- b. 作者の『源氏物語』

(15)、(16)が示すように、本論文で問題となっている「値段」「大きさ」「長所」といった名詞は、非飽和名詞という性質はもつものの、必ずしも西山 (2003) によるタイプ D の例とは一致しないと考えられる。そこで本論文では、(4)、(5)、(6)、(7)などの例における2つのNが、それぞれどのような意味をもっているのかを考察することによって、分類にと

どまらないこれまで知られていなかった「NのN」のもつ特徴について明らかにしていく。

2. linguistic SR の導入

2.1. SR 式の4つのタイプ

本論文では、「NのN」において容認不可能となる例について、2つのNのもつ意味や機能に着目して考察を行う。そこでその手段として、さまざまな語彙をその機能によって体系的に分類した上山 (2011, 印刷中) の linguistic SR を導入する。上山 (2011, 印刷中) では、脳内には具体的なモノ／コトについての情報が、それぞれの属性とその値の組の集合という形で記憶されていると仮定し、そのような具体的モノ／コトを Object、その Object がもつ情報を Object Information としている。そしてわれわれがコミュニケーションをとる際には、互いに持つこの Object Information を披露し合って、情報を増やしたり修正したりする行為が含まれているとされる。以下はある Object についての例である。

- (17) a. X_{12} : 名称=太郎、類=大学生、年齢=22、出身地=福岡、生年月日=4/18、...
- b. E_{378} : 名称=2014 ワールドカップ、開催地=ブラジル、開幕日=2014/6/12、...
- c. E_{56} : 類=壊す、対象物= X_6 、行為者= X_{256} 、...

(17a)は話者にとって、知っている人物についての情報であり、12 という任意の指標番号が与えられている。同一の Object であると認識されていれば同じ指標番号が、異なる Object であると認識されていれば異なる指標番号をもっている想定される。そして(17a)の人物は、「太郎」という「名称」をもち、「大学生」という「類」に属し、「出身地」は「福岡」であるといったように、その人物についてのさまざまな情報が細かく記述されている。同様に(17b)、(17c)では、あるコトという Object についての情報が記述されている。(17b)ではある「大会」について、その大会の「名称」が「2014 ワールドカップ」であり、「開催国」が「ブラジル」であるといったさまざまな情報が記述されており、また(17c)ではある動作をあらわすコトの Object について、それが「壊す」という「類」に属し、その動作の「対象物」が「 X_6 」で「行為者」が「 X_{256} 」という情報を示している。このような Object がもっている情報において、「名称」「類」「出身地」といった、それぞれの Object の属性となるものが attribute とされ、「太郎」「大学生」「ブラジル」「 X_6 」といった具体的な値が value とされる。この概念は、本論文においても例文を分析する際に非常に重要となる考え方である。このようにして、LF を変換して直接派生した言葉を持つ情報のことを linguistic SR、そしてそれぞれの語彙が変換された一つ一つの式を SR 式という。以下は上山 (2011, 印刷中) による SR 式の4つの分類である。

- (18) a. x_n 型 : モノを指す表現の SR

- b. e_n 型：コトを指す表現の SR
- c. v_n 型：attribute に相当する表現の SR
- d. p_n 型：ある Object の何らかの attribute がどのような value をもっているかという、特性を記述する表現の SR

以下で(18)の4つのタイプのSR式がそれぞれ何を表しているかを具体的にみていく。

(19) x_n 型

- a. ジョン x_1 : 名称=ジョン
- b. 教師 x_2 : 類=教師
- c. 携帯電話 x_3 : 類=携帯電話

(18a)の x_n 型は具体的なモノを指す表現の SR であり、たいてい「名称」という attribute の value か、「類」という attribute の value に対応する。(19a)は「ジョン」という「名称」をもつ具体的な人物についての SR 式で、(19b)は「教師」という「類」に属している具体的な人物である Object を示した SR 式となっている。また人物だけでなく物についても同様で、(19c)は「携帯電話」という「類」に含まれる具体的なモノである Object を示した SR 式となっている。これら x_n 型の表現はいずれも、具体的なモノを指す表現の SR として区分される。

次は e_n 型について見ていく。 e_n 型は、その Object が項をとる場合ととらない場合とに分けることができる。

(20) e_n 型 (e_n が項をとらない場合)

- a. 日本シリーズ 2011 e_1 : 名称=日本シリーズ 2011
- b. 会議 e_2 : 類=会議

(21) e_n 型 (e_n が項をとる場合)

- a. 変わる e_1 : 類=変わる , Theme=__
- b. 変える e_2 : 類=変える , Theme=__ , Agent=__

コトに対応する表現もモノの場合と同様であり、(18b)のような e_n 型の表現は(20)、(21)のようにあらわされる。(20)の e_n 型の例は x_n 型とほぼ同様で、具体的なコトを指す表現の SR も「名称」という attribute の value か、「類」という attribute の value に対応する。しかし(21)の「変わる／変える」のような場合は、関わってくる参加者を項にとるという点で(20)とは違いが存在する。そのため SR にも(20)とは違いが生じ、(21a)では「類」に加

えて、「変わる」の項としての「Theme」が必要となり、(21b)では「変える」の項としての「Theme」と「Agent」の2つの項が必要となる。そして(21)の空欄は、どの NP のことを指しているのかが、話者の database にある知識と同定されれば埋められ、その e_n 型のコトをはっきりと理解できるのである。

次は v_n 型について見ていく。

(22) Object と attribute の関係

- a. E_{345} : ... , 犯人= X_{12} , 被害者= X_{598} , ...
- b. v_1 : 犯人(E_{345})
- c. v_2 : 被害者(E_{345})

(23) v_n 型の具体例

- a. (～)の年齢 v_1 : 年齢()
- b. (～)の名前 v_2 : 名前()

v_n 型はある Object についてのさまざまな情報における属性、つまり attribute に相当する表現である。(22)の例は、ある具体的な事件 E_{345} についての SR 式を想定したものである。事件については「名称」「場所」「犯人」「被害者」などのさまざまな情報を表す attribute が存在すると考えられる。(22b)はそのような情報のうちの「犯人」という attribute について、そして(22c)は「被害者」という attribute を SR 式で表現したものである。このような v_n 型の表現には必ずカッコが存在し、その中には関与する Object が入る。これらの表現においては、たとえば「犯人」という value が誰であるかを知らないままでも問題は無いが、関与する Object が同定できない場合は処理を進めることができないとされる。この attribute に相当する v_n 型の表現は本論文においても考察の大きな対象となる。

次は p_n 型の例である。

(24) p_n 型の具体例

- a. 美しい p_1 : ____ ()=美しい
- b. 神経質だ p_2 : 性格()=神経質だ
- c. すごい p_3 : ____ ()=すごい

これらの例に示されるように、 p_n 型には形容詞や形容動詞のような Object の特性を記述する表現が含まれる。形容詞や形容動詞のあらわす内容というのは、Object についての何らかの attribute に対応する value についての情報であるが、その value 自体は Object ではなく、度合いが関わるものであり、このような p_n 型の表現は「ある Object がある attribute のよう

に表現できる value をもつこと」をあらわしているとされる。次に v_n 型と区別するため、(24)とは異なるいくつかの p_n 型の具体例を見る。

(25) p_n 型と v_n 型の区別

- a. 「彼女の年齢には驚いた。」 = 「彼女が～才であることに驚いた。」
 p_1 : 年齢(X_5)= _____
- b. 「彼女の年齢をこの欄に書いてください。」 = 欄に具体的な数値を記入
 v_1 : 年齢(X_5)

(25)の例はいずれも、先ほど v_n 型の表現として出てきたものであるが、それとは意味が違うことがわかる。たとえば(25a)の「彼女の年齢には驚いた。」という文は、「30才に驚いた。」といった具体的な「年齢」の値に驚いたのではなく、「彼女が30才であることに驚いた」という意味をあらわしている。その一方で(25b)では、「彼女の年齢をこの欄に書いてください。」という表現で「年齢」が指すものは、「彼女が～才であること」ではなく、「30才」という具体的な数値なのである。このことからよくわかるように、 p_n 型の SR 式は attribute 名に相当する表現の場合、「ある Object がそのような value をもつこと」をあらわしているのである。このように、value に相当するか、attribute に相当するかという点では違いが存在する(24)と(25)の p_n 型の表現ではあるが、どちらも「ある Object の何らかの attribute がどのような value をもっているかという、特性を記述する表現」である点では、同じ p_n 型の表現であるといえる。また、「太郎の年齢」という「NのN」における「年齢」という表現は v_n 型と p_n 型どちらにもなりうるが、「太郎の年齢」は「 x_n の v_n 」の形式として意味的にも容認されるため「年齢」は v_n 型として扱い、本論文においては、 p_n 型は基本的に value に相当するものとして扱う。

さまざまな語彙が(18)のような分類に対応していると考えることによって、表現の意味の対応がすっきりと記述できるとされる。本論文においても(18)のような語彙の分類にしたがって、さまざまな「NのN」におけるNの意味や機能についての考察をおこなっていく。

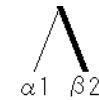
2.2. 修飾関係

上山 (2011, 印刷中) では、2.1節のような SR 式であらわされるさまざまな修飾関係について、その要素同士の関係性を解くためのいくつかの規則を定義している。まず以下の例を見てみる。

- (26) a. 赤い₁ 車₂
- b. 静かな₁ 部屋₂

(27) 修飾関係がもたらす linguistic SR

- a. 修飾関係の LF



- b. 修飾関係の linguistic SR (「 O_n 」は、指標 n をもつ x_n, e_n, v_n, p_n のいずれかとする)

O_1 :
 O_2 : | O_1

(26)のような表現は(27a)の LF 構造をもっており、そのような修飾関係は(27b)のような linguistic SR であらわされる。(27b)における「|」は「～は～に関係がある」ということを示しており、(27)の例においては「 α_1 は β_2 に関係している」ということを意味する。しかし、それは逆に言えば「 α_1 は β_2 に関係している」ということ以上のことは言っていないことも意味しており、その「関係」がどのようなものであるかは、われわれ言語使用者が推論して復元しているとされる。このような論理的思考は abduction と呼ばれる。(26)の表現は abduction を使ってあらわせば(28)になる。

(28) (26)の linguistic SR

- a. 赤い₁ 車₂ p_1 :色(x_2)=赤い , x_2 :類=車 | p_1
- b. 静かな₁ 部屋₂ p_1 :状態(x_2)=静かな , x_2 :類=部屋 | p_1

このような形で、上山 (2011, 印刷中) ではさまざまな推論規則が定義されている。以下でそのいくつかを紹介する。

(29) 推論規則・ a_n 's relevance to o_n

p_k : Attribute (o_i)=Value_j
 $\Rightarrow o_i$: | p_k

(30) attribute 追加の abduction

- a. 父親₁ の 太郎₂
- b. linguistic SR
 p_1 : 類()=父親
 x_2 : 名称=太郎 | p_1
- c. abduction による導出

x_2 : 名称=太郎 , 類=父親

(29)の規則に従って abduction が行われると、(30c)が導出される。この式にたどりつくことで、われわれは(30a)の表現を「理解」したという認識になる。結果的にこのような abduction では、主要部の Object Information に、修飾部があらわす attribute=value という式を新たに加える効果をもつ。

(31) 推論規則・ v_n 's relevance to o_n

o_i : Attribute= v_j ...
 $\Rightarrow o_i$: | v_j

(32) value 認定の abduction

a. 携帯電話₁ の 操作₂

b. linguistic SR

x_1 : 類=携帯電話

e_2 : 類=操作 , Theme=____ , Agent=____ | x_1

c. abduction による導出

x_1 : 類=携帯電話

e_2 : 類=操作 , Theme= x_1 , Agent=____

(31)の推論規則による(32)のような abduction の場合には、結果的に主要部に相当する Object に関わる value を修飾部で認定する。

(33) 推論規則・ o_n 's relevance to v_n

v_j : Attribute (o_i)
 $\Rightarrow v_j$: | o_i

(34) オブジェクト認定の abduction

a. 太郎₁ の 年齢₂

b. linguistic SR

x_1 : 名称=太郎

v_2 : 年齢() | x_1

c. abduction による導出

x_1 : 名称=太郎 , 年齢= v_2

v_2 : 年齢(x_1)

(33)の規則によって、(34)のような、主要部が v_n 型の SR 式を導入する場合の abduction を行うと、主要部に相当する value の持ち主である Object の認定と、修飾部に相当する Object に関わる value の認定が同時に起こる。

このように、いくつかの推論規則に基づいて行われる abduction によって、さまざまな SR 式の修飾関係が解釈されていると、上山 (2011, 印刷中) では主張される。本論文においても、この linguistic SR や abduction という考えを導入してさまざまな「NのN」を分析していく。

3. 主張

本論文のはじめに、さまざまな名詞の組み合わせに対して用いられ、あらゆる表現が容認可能となる「N の N」の中にも、(4)、(5)、(6)、(7)のように容認不可能となる例が存在することを見たが、このような事実から本論文では以下のことを主張する。

(35) 「N₁のN₂」において、修飾部 N₁ の位置に attribute に相当する v_n 型の表現はあらわれない。

(36) 「N₁のN₂」において、主要部 N₂ の位置に p_n 型の表現はあらわれない。

次の章では(35)の主張に基づいて、容認不可能となる例や、そのような例が容認可能となる現象について分析を行う。また本論文ではそのような分析の際に、2章で述べた linguistic SR を用いて「N の N」を考察していくが、その中で p_n 型の表現と v_n 型の表現による修飾関係においては、以下のような推論規則が存在していることを主張する。

(37) 推論規則：attribute の認定

$p_n : \text{Attribute}_j(o_i) = \text{Value}_k$

$\Rightarrow p_m : \text{---}(o_i) = \text{Value}_k$

$v_n : \text{Attribute}_j(o_i) \mid p_m$

(37)における「 \Rightarrow 」の後ろの式は、p_n型とv_n型の表現の修飾関係をあらわした linguistic SR であり、このような例における「 \mid 」は「 \sim は \sim に関係がある」ということを示している。2章で述べたように、このことは(37)のp_n型とv_n型の表現の修飾構造においては、「p_nがv_nに関係がある」ということだけが明示されていて、そこからわれわれは元の式（「 \Rightarrow 」の上の式）を復元し、その関係性を逆算するのである。このような思考において、(37)のような abduction の規則を適用すると、p_nに相当する表現とv_nに相当する表現が Merge したとき、できた NP の SR は必ず p_n型になるということがいえるのである。本論文では新たな推論規則として、(37)のp_n型とv_n型の修飾関係に適用される abduction 式を主張する。

4. 問題となる例の考察

4.1. 「??値段の商品」と主張の(35)

1.2節において、さまざまな名詞の組み合わせに対して用いられる「N の N」という表現の中にも、(4)、(5)、(6)のような容認不可能な例が存在することを見たが、これらの例におけるそれぞれのNの関係についてSRを用いて考察する。

(38) ??値段₁ の 商品₂ v₁:値段() , x₂:類=商品 | v₁

(39) ??大きさ₁ の 靴₂ v₁:大きさ() , x₂:類=靴 | v₁

(40) ??規模₁ の 大会₂ v₁:規模() , e₂:類=大会 | v₁

このように、SRを用いて例文を分析してみると、それぞれの名詞がどのような意味、機能をもっているのかがよくわかる。つまり容認不可能となる(38)～(40)の表現は、いずれもSRでいうと「v_nのN」という形になっていると考えられる。

(41) a. ??値段₁ の 商品₂ v₁:値段() , x₂:類=商品 | v₁
b. 値段₁ の タグ₂ p₁:記載内容(x₂)=値段
x₂:類=タグ | p₁

(41)における「値段」という名詞は修飾関係における head の NP によって、v_n型の表現にもp_n型の表現にもなりうる。ただ、p_n型の表現は「ある Object の何らかの attribute が \sim という value であること」を意味しているため、必ず value に関する情報をあらわし、またカッコの中には関与する Object が必ず入る。(41a)の「値段」がp_n型であるとすれば、対象の Object として「商品」がカッコに入り、「値段」がその特性を記述しなければならない。しかし(41a)の表現は、(41b)とは違ってそのような関係をもっておらず、また value に関する記述も想定できない。したがって、(41a)の「??値段の商品」という表現は、「attribute の Object」という関係をもった「v_nのx_n」の表現であるといえる。このように「attribute の Object」という関係をあらわす、「v_nのN」というパターンの「NのN」は他にも数多く存在するが、それらの表現はいずれも容認不可能となる。このことから、3章で述べた(35)を主張することができる。

以下では、容認不可能となる「v_nのN」の例をさらに挙げ、またこのような容認不可能な例に関わる興味深い現象について考察する。

4.2. 「お手頃な値段の商品」と主張の(37)

4.1.節でも見たように、表現の自由度が高い「NのN」の中に存在する(4)、(5)、(6)のような容認不可能な「v_nのN」の例であるが、このような例は「v_nのN」の左側にさらなる修飾表現を加えることで容認可能なものとなる。

- (42) a. 商品の値段
b. ??値段の商品
c. お手頃な値段の商品
- (43) a. 靴の大きさ
b. ??大きさの靴
c. ちょうどいい大きさの靴
- (44) a. 大会の規模
b. ??規模の大会
c. 世界最大の規模の大会

以下では、このような例をSRによって考える。2章でも述べたように、それぞれの例における「|」は「～は～に関係がある」ということを示しており、「N₁のN₂」の修飾構造としては、「修飾部N₁は主要部N₂に関係がある」ということだけが linguistic SR によって示されているのである。

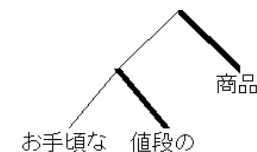
- (45) a. 商品₁の値段₂ x₁:類=商品, v₂:値段(x₁)|x₁
b. ??値段₁の商品₂ v₁:値段(), x₂:類=商品|v₁
c. お手頃な₁値段₂の商品₃ p₁:____(v₂)=お手頃な, v₂:値段(x₃)|p₁, x₃:類=商品|v₂
- (46) a. 靴₁の大きさ₂ x₁:類=靴, v₂:大きさ(x₁)|x₁
b. ??大きさ₁の靴₂ v₁:大きさ(), x₂:類=靴|v₁
c. ちょうどいい₁大きさ₂の靴₃ p₁:____(v₂)=ちょうどいい, v₂:大きさ(x₃)|p₁, x₃:類=靴|v₂
- (47) a. 大会₁の規模₂ e₁:類=大会, v₂:規模(e₁)|e₁
b. ??規模₁の大会₂ v₁:規模(), e₂:類=大会|v₁

- c. 世界最大₁の規模₂の大会₃ p₁:____(v₂)=世界最大, v₂:規模(e₃)|p₁, e₃:類=大会|v₂

4.1.節で説明したように、容認不可能な「v_nのx_n」「v_nのe_n」というSR式であらわされる(45b)~(47b)のような例であるが、(45c)~(47c)で示されるように、その左側にさらに p_n型の修飾表現を加えると容認可能な表現となる。(45)では、「??値段の商品」という表現では意味が通じなかったのに対して、1つ修飾表現を加えた「お手頃な値段の商品」は意味の通じる表現である。同様に(46)、(47)においても、「??大きさの靴」から p_n型の表現を加えた「ちょうどいい大きさの靴」へ、そして「??規模の大会」から p_n型を加えた「世界最大の規模の大会」へと、1つ修飾表現を加えることで容認不可能なものから容認可能なものへと変化する。このように、容認不可能な「v_nのN」が、「p_nな(の)v_nのN」という形になることで容認可能となるのはなぜだろうか。

このような現象について説明すべく、その修飾関係を詳細に分析していく。まず、「お手頃な値段の商品」のLF構造について考察する。

- (48) a.



- b.



「お手頃な値段の商品」の統語構造については(48)の2つが考えられる。しかし、本論文において問題となっているように、「??値段の商品」という表現は意味の通じない容認不可能な表現である。したがって、「値段」と「商品」が Merge しているとされる(48b)の例は不適切となり、「お手頃な値段の商品」の統語構造としては(48a)が適切であると考えられる。「お手頃な値段の商品」がこのような統語構造をもっているとすれば、まず「お手頃な」と「値段」が Merge し、それがさらに「商品」と Merge することになる。

次に、(4)の「お手頃な値段の商品」という例におけるそれぞれの要素のSR式を見る。

(49) 「お手頃な₁」「値段₂」「商品₃」のSR式

- a. $p_1: \text{____}(\) = \text{お手頃な}$
- b. $v_2: \text{値段}(\)$
- c. $x_3: \text{類} = \text{商品}$

それぞれの要素のSR式は(49)のようになっていると考えられる。「お手頃な」は p_n 型のSR式で表現され、「～というObjectが何らかのattributeについて、『お手頃な』というvalueをもっていること」をあらわしている。つまり、「お手頃な」という表現だけでは、どのようなattributeについてのvalueを記述しているのかはわからないということになる。そのため(49a)のSR式においても、カッコの前にある、対象となるattributeをあらわす部分については空欄となっている。そして2つ目の要素である「値段」は、あるObjectについてのattributeをあらわす v_n 型のSR式になり、3つ目の「商品」は具体的なObjectをあらわす x_n 型のSR式となる。(49)のようなそれぞれのSR式が(48)のようなLF構造をもっているとすれば、以下のように、まず p_n 型の表現「お手頃な」と v_n 型の表現「値段」による修飾関係が考えられる。

(50) 「お手頃な₁」と「値段₂」のMerge

- a. $p_1: \text{____}(\) = \text{お手頃な}$
- b. $v_2: \text{値段}(\) \mid p_1$
- c. $p_n: \text{値段}(\) = \text{お手頃な}$

「お手頃な」と「値段」のMergeでは、(50a)と(50b)によって(50c)のようなSR式が作られることが考えられる。(50a)の「お手頃な」のSR式には、もともとObjectについての情報に加えて、もう1つの空所が存在し、何のattributeについての情報であるかが特定されていない。一方、 v_n 型の「値段」という名詞はObjectについての情報以外に空所は存在しない。そのような関係をもつ p_1 と v_2 がMergeすると、 v_2 のあらわすattributeが、attributeに関しての空所をもつ p_1 の空所を埋めると考えられる。その結果、「お手頃な値段」という1つの p_n 型の意味が形成されると考えられ、「お手頃な値段」という「 $p_n + v_n$ 」の表現は(48a)のように主要部があくまでも「値段」という v_n の部分でありながらも、全体のSR式は(50c)のように p_n 型になっているのだと考えることができる。このようなSRの関係の解釈は、3章で主張した(37)の推論規則に基づく。

(37) 推論規則：attributeの認定

$$p_n: \text{Attribute}_j(\ o_i) = \text{Value}_k$$

$$\Rightarrow p_m: \text{____}(\ o_i) = \text{Value}_k$$

$$v_n: \text{Attribute}_j(\ o_i) \mid p_m$$

(37)の規則に基づく abduction によって、 p_n 型と v_n 型の表現の修飾関係による構築物は1つの p_n 型の表現として解釈される。この考えに従って(50)のようなMergeが行われているとすると、これまでのSR式の分析は少し改められる。

(51) 前バージョンの「お手頃な₁ 値段₂ の 商品₃」のSR式

- a. $p_1: \text{____}(\ v_2) = \text{お手頃な}$
- b. $v_2: \text{値段}(\ x_3) \mid p_1$
- c. $x_3: \text{類} = \text{商品} \mid v_2$

(52) 新バージョンの「お手頃な値段₁ の 商品₂」のSR式

- a. $p_1: \text{値段}(\ x_2) = \text{お手頃な}$
- b. $x_2: \text{類} = \text{商品} \mid p_1$

これまでは「お手頃な値段の商品」というNPを(51)のように分析していた。しかし(37)の abduction を適用することで、「お手頃な値段の商品」は(52)のようなSR式に解釈できる。このようなSR式で表現されるとすると、(45c)~(47c)のような容認可能となった「NのN」表現はいずれも「 p_n のN」であると解釈でき、この「 p_n のN」という形になったことによって、(35)に抵触せず容認可能な表現となったのだと考えられる。(46c)、(47c)の表現も(45c)と同様に、以下のような新バージョンのSR式に改められる。

- (53) a. ちよどいい₁ 大きさ₂ の 靴₃ $p_1: \text{____}(\ v_2) = \text{ちよどいい}$,
 $v_2: \text{大きさ}(\ x_3) \mid p_1$, $x_3: \text{類} = \text{靴} \mid v_2$
- b. ちよどいい大きさ₁ の 靴₂ $p_1: \text{大きさ}(\ x_2) = \text{ちよどいい}$,
 $x_2: \text{類} = \text{靴} \mid p_1$

- (54) a. 世界最大₁ の 規模₂ の 大会₃ $p_1: \text{____}(\ v_2) = \text{世界最大}$,
 $v_2: \text{規模}(\ e_3) \mid p_1$,
 $e_3: \text{類} = \text{大会} \mid v_2$
- b. 世界最大の規模₁ の 大会₂ $p_1: \text{規模}(\ e_2) = \text{世界最大}$,
 $e_2: \text{類} = \text{大会} \mid p_1$

このような例はほかにも数多く存在し、「 v_n のN」では容認不可能である表現に p_n の表現を加えると、「 p_n のN」となって容認可能になると考えられる。

- (55) a. ジョン₁の長所₂ x_1 :名称=ジョン , v_2 :長所(x_1)| x_1
 b. ??長所₁のジョン₂ v_1 :長所() , x_2 :名称=ジョン | v_1
 c. 人懐っこさが長所₁のジョン₂ p_1 :長所(x_2)=人懐っこさ ,
 x_2 :名称=ジョン | p_1
- (56) a. 車₁の色₂ x_1 :類=車 , v_2 :色(x_1)| x_1
 b. ??色₁の車₂ v_1 :色() , x_2 :類=車 | v_1
 c. 赤い色₁の車₂ p_1 :色(x_2)=赤い ,
 x_2 :類=車 | p_1
- (57) a. 太郎₁の性格₂ x_1 :名称=太郎 , v_2 :性格(x_1)| x_1
 b. ??性格₁の太郎₂ v_1 :性格() , x_2 :名称=太郎 | v_1
 c. 穏やかな性格₁の太郎₂ p_1 :性格(x_2)=穏やかな ,
 x_2 :名称=太郎 | p_1
- (58) a. プラモデル₁の作り方₂ x_1 :類=プラモデル ,
 v_2 :作り方(x_1)| x_1
 b. ??作り方₁のプラモデル₂ v_1 :作り方() ,
 x_2 :類=プラモデル | v_1
 c. 複雑な作り方₁のプラモデル₂ p_1 :作り方(x_2)=複雑な ,
 x_2 :類=プラモデル | p_1
- (59) a. メアリ₁の成績₂ x_1 :名称=メアリ , v_2 :成績(x_1)| x_1
 b. ??成績₁のメアリ₂ v_1 :成績() , x_2 :名称=メアリ | v_1
 c. ずば抜けた成績₁のメアリ₂ p_1 :成績(x_2)=ずば抜けた ,
 x_2 :名称=メアリ | p_1
- (60) a. 男の子₁の名前₂ x_1 :類=男の子 , v_2 :名前(x_1)| x_1
 b. ??名前₁の男の子₂ v_1 :名前() , x_2 :類=男の子 | v_1
 c. 珍しい名前₁の男の子₂ p_1 :名前(x_2)=珍しい ,
 x_2 :類=男の子 | p_1

- (61) a. パソコン₁の機能₂ x_1 :類=パソコン , v_2 :機能(x_1)| x_1
 b. ??機能₁のパソコン₂ v_1 :機能() , x_2 :類=パソコン | v_1
 c. 最先端の機能₁のパソコン₂ p_1 :機能(x_2)=最先端 ,
 x_2 :類=パソコン | p_1
- (62) a. 工芸品₁の形₂ x_1 :類=工芸品 , v_2 :形(x_1)| x_1
 b. ??形₁の工芸品₂ v_1 :形() , x_2 :類=工芸品 | v_1
 c. 面白い形₁の工芸品₂ p_1 :形(x_2)=面白い ,
 x_2 :類=工芸品 | p_1
- (63) a. 次郎₁の身長₂ x_1 :名称=次郎 , v_2 :身長(x_1)| x_1
 b. ??身長₁の次郎₂ v_1 :身長() , x_2 :名称=次郎 | v_1
 c. クラスーの身長₁の次郎₂ p_1 :身長(x_2)=クラスー ,
 x_2 :名称=次郎 | p_1
- (64) a. 機械₁の構造₂ x_1 :類=機械 , v_2 :構造(x_1)| x_1
 b. ??構造₁の機械₂ v_1 :構造() , x_2 :類=機能 | v_1
 c. 単純な構造₁の機械₂ p_1 :構造(x_2)=単純な ,
 x_2 :類=機械 | p_1
- (65) a. 料理₁の味₂ x_1 :類=料理 , v_2 :味(x_1)| x_1
 b. ??味₁の料理₂ v_1 :味() , x_2 :類=料理 | v_1
 c. 独特な味₁の料理₂ p_1 :味(x_2)=独特な ,
 x_2 :類=料理 | p_1
- (66) a. 通り魔事件₁の動機₂ e_1 :類=通り魔事件 , v_2 :動機(e_1)| e_1
 b. ??動機₁の通り魔事件₂ v_1 :動機() , e_2 :類=通り魔事件 | v_1
 c. 理不尽な動機₁の通り魔事件₂ p_1 :動機(e_2)=理不尽な ,
 e_2 :類=通り魔事件 | p_1
- (67) a. 東北地方太平洋沖地震₁の犠牲者数₂ e_1 :名称=東北地方太平洋沖地震
 v_2 :犠牲者数(e_1)| e_1
 b. ??犠牲者数₁の東北地方太平洋沖地震₂ v_1 :犠牲者数()

- e₂:名称=東北地方太平洋沖地震 | v₁
- c. 相当な犠牲者数₁ の 東北地方太平洋沖地震₂
- p₁:犠牲者数(e₂)=相当な ,
e₂:名称=東北地方太平洋沖地震 | p₁
- (68) a. 決勝レース₁ の 順位₂ e₁:類=決勝レース , v₂:順位(e₁) | e₁
b. ??順位₁ の 決勝レース₂ v₁:順位() , e₂:類=決勝レース | v₂
c. 過去最高の順位₁ の 決勝レース₂
- p₁:順位(e₂)=過去最高 ,
e₂:類=決勝レース | p₁
- (69) a. 連続殺人事件₁ の 犯人₂ e₁:類=連続殺人事件 ,
v₂:犯人(e₁) | e₁
b. ??犯人₁ の 連続殺人事件₂ v₁:犯人() ,
e₂:類=連続殺人事件 | v₁
c. 残忍な犯人₁ の 連続殺人事件₂ p₁:犯人(e₂)=残忍な ,
e₂:類=連続殺人事件 | p₁
- (70) a. 合格者₁ の 点数₂ x₁:合格者() , v₂:点数(x₁) | x₁
b. ??点数₁ の 合格者₂ v₁:点数() , x₂:合格者() | v₁
c. 最高の点数₁ の 合格者₂ p₁:点数(x₂)=最高 ,
x₂:類=合格者¹ | p₁

(55c)~(70c)の表現は、(45c)~(47c)のように三つのSR式によって考えることもできる。しかし、この章における分析にしたがって、(55c)~(70c)の例を2つのSR式「p_nのN」であらわされる表現だと考える。この考察をふまえると、これまで容認不可能な例として挙げた表現は「v_nのN」という形であらわされ、そこに修飾表現を加えて容認可能となった表現は「p_nのN」というSR式であらわされているのだということがいえる。このことから、修飾表現を加えたことで表現の容認性に変化が生じた理由は、「N₁のN₂」においてN₁に相当する表現のSR式がv_n型からp_n型に変化したことであるといえ、またこの考察は「修飾部N₁の位置にattributeに相当するv_n型の表現はあらわれない」という(35)

¹ 「合格者」という名詞は基本的に、関与するObjectが存在するv_n型の表現であると考えられる。しかし、(70)のように「合格者」が特定の人物をあらわしていると考えられる場合については、本論文ではx_n型の表現として扱う。

の主張とも一致する。

4.3. 「お手頃な値段の商品」と「象は鼻が長い」

本論文で問題となっている「お手頃な値段の商品」のような「value + attribute のObject」すなわち「p_nのN」の表現であるが、このような名詞句は有名な構文「象は鼻が長い」と共通点があると考えたい。

- (71) a. 象は鼻が長い。
b. 鼻が長い象
c. 長い鼻の象

(71a)は非常に有名であり、これまでにたくさんの分析が行われてきた構文である。この文は1つの名詞句で表現すると、完全に同じ意味とは言えないものの、(71c)と表現することができる。そしてこの(71c)は、これまで見てきたような名詞句と同様の例であると考えられる。

- (72) a. 象₁ の 鼻₂ x₁:類=象 , v₂:鼻(x₁) | x₁
b. ??鼻₁ の 象₂ v₁:鼻() , x₂:類=象 | v₁
c. 長い鼻₁ の 象₂ p₁:鼻(x₂)=長い ,
x₂:類=象 | p₁

厳密に言えば、「鼻」という名詞は「象」というObjectに関しての特性を指すattributeではないのかもしれない。しかし(72)の例では「象」が全体を指し、また「鼻」がその全体の中の一部を指しており、2つの名詞が「全体と部分」の関係を構成している。このような関係はObjectとattributeがもっている関係と同様であると考えられる。この「象は鼻が長い」構文について、西山(2003)では2つの解釈が存在するとしており、その1つが「長鼻一説み」とされるものである。この読みでは、「鼻が長い」の部分を「長鼻の」であったり「長鼻だ」であったりといった、ひとつのまとまった形容詞・形容動詞に匹敵する表現と解釈する。そしてその「鼻が長い」という1つのまとまった修飾表現が、「象」全体についての属性を説明していると解釈される。この考え方は、これまで見てきたような「NのN」表現に対しても適用できる。

- (73) a. 長い鼻₁ の 象₂ p₁:鼻(x₂)=長い ,
x₂:類=象 | p₁
b. (その)象₁ は 鼻が長い₂ 。 x₁:類=象 | p₂ ,

- p₂:鼻(x₁)=長い
- (74) a. お手頃な値段₁ の 商品₂ p₁:値段(x₂)=お手頃な ,
 b. (その) 商品₁ は 値段がお手頃だ₂ 。 x₂:類=商品 | p₁
 x₁:類=商品 | p₂ ,
 p₂:値段(x₁)=お手頃
- (75) a. ちょうどいい大きさ₁ の 靴₂ p₁:大きさ(x₂)=ちょうどいい ,
 b. (その) 靴₁ は 大きさがちょうどいい₂ 。 x₂:類=靴 | p₁
 x₁:類=靴 | p₂ ,
 p₂:大きさ(x₁)=ちょうどいい
- (76) a. 人懐っこさが長所₁ の ジョン₂ p₁:長所(x₂)=人懐っこさ ,
 b. ジョン₁ は 長所が人懐っこさだ₂ 。 x₂:名称=ジョン | p₁
 x₁:名称=ジョン | p₂ ,
 p₂:長所(x₁)=人懐っこさ
- (77) a. 穏やかな性格₁ の 太郎₂ p₁:性格(x₂)=穏やか ,
 b. 太郎₁ は 性格が穏やかだ₂ 。 x₂:名称=太郎 | p₁
 x₁:名称=太郎 | p₂ ,
 p₂:性格(x₁)=穏やか
- (78) a. 最高の点数₁ の 合格者₂ p₁:点数(x₂)=最高 ,
 b. (その) 合格者₁ は 点数が最高だ₂ 。 x₂:類=合格者 | p₁
 x₁:類=合格者 | p₂ ,
 p₂:点数(x₁)=最高

このように、これまで見てきた(55c)~(70c)のような「value + attribute の Object」となる「p_n の N」の表現は、「象は鼻が長い」のような形に言いかえることができる。これらの表現に西山 (2003) の考え方を適用すると、(74b)の「(その) 商品は値段がお手頃だ」のような「A は B が C だ」の表現においては、「B が C だ」全体が1つの修飾表現として A についての属性をあらわしていると解釈できるため、「値段がお手頃だ」の「attribute + value」つまり「v_n と p_n」の部分で、Object である「商品」についての属性をあらわしているのだということになる。これは先ほどの 4.2 節の考え方も一致する。つまり、「値段がお手頃だ」「v_n + p_n」のような「B が C だ」に相当する部分が、1つのまとまった修飾表現と

して A についての属性を記述しているという解釈は、SR 式でいえば(52)のように、p_n と v_n が Merge して1つの p_n という特性を記述する SR になって Object を修飾しているという分析と一致しているのである。このように 4.2 節の分析を改めて示すことは、「N₁ の N₂ において、attribute に相当する v_n 型の表現は N₁ にあらわれないことができない」という(35)の主張を改めて示すことにもつながる。そして、(35)のような制約がはたっていたことによって、非常に多くの名詞の組み合わせのパターンが容認される「N の N」においても、意味の通じない容認不可能な例が存在していたのだと改めて考えられるのである。このような主張を裏付けるべく、次の 5 章ではさまざまな「N の N」のパターンについての考察を行う。

4.4. 「??ドアの自動」と主張の(36)

さまざまな名詞によって構成される「N の N」において容認不可能となる例は、「??値段の商品」のような(34)の場合以外にも存在する。

- (79) a. ??ドア₁ の 自動₂ x₁:類=ドア ,
 p₂:____(x₁)=自動 | x₁
 b. ??レース₁ の 前回₂ e₁:類=レース ,
 p₂:____(x₁)=前回 | e₁

(79a)の「??ドアの自動」という表現は不自然であり、「ドアという Object が自動という value をもっている」とは解釈できない。また(79b)も同様に「前回のレース」とは言えても、「??レースの前回」という表現は不自然であり、「レースという Object が前回という value をもっている」という解釈は不可能である。このような容認不可能な表現は、いずれも「N の p_n」という形をしており、「N₁ の N₂」における N₂ の位置に p_n 型の表現が存在している。2 章で説明したように、p_n 型の表現というのは「ある Object の attribute がどのような value をもっているかという、特性を記述する表現の SR」であり、形容詞や形容動詞などの修飾表現が主に該当する。したがって、p_n 型の表現は「N の N」においても基本的に修飾部の位置に現れることが想定され、(79)のように p_n が主要部の位置に現れる表現は容認不可能となっているのだと考えられる。以下でもさまざまな「N の p_n」の表現について考察する。

4.4.1. v_n の p_n

(79)と同様に、「v_n の p_n」のパターンは不自然な表現であり、容認不可能であると考えられる。

- (80) v_n の p_n

a. ??身長₁ の クラスー₂

v₁:身長() ,
p₂:____()=クラスー | v₁

b. ??年齢₁ の かなり₂

v₁:年齢() ,
p₂:____()=かなり | v₁

b. ??会議₁ の 明日₂

p₂:____(e₁)=史上最高 | e₁
e₁:類=会議 ,
p₂:日時(e₁)=明日 | e₁

(80)の表現はどちらも不自然であり、たとえば「クラスーの身長太郎」とは言えても、(80a)の表現を使って「身長クラスー太郎」とは言わない。また、「彼はかなりの年齢だ。」という表現は意味が通じるが、(80b)のように「??彼は年齢のかなりだ。」という表現は非常に不自然であり容認されない。

4.4.2. x_n の p_n

(79a)で示されるように「x_n の p_n」のパターンは容認不可能となる。

(81) x_n の p_n

a. ??プロ野球選手₁ の 現役₂

x₁:類=プロ野球選手 ,
p₂:状態(x₁)=現役 | x₁

b. ??楽器₁ の 木製₂

x₁:類=楽器 , p₂:素材(x₁)=木製 | x₁

(81)の表現はどちらも自然な表現とは言い難く、(81a)を「現役という value をもったあるプロ野球選手」と解釈したり、(81b)を「木製という value をもったある具体的な楽器」とは解釈できない。その理由としては、やはり修飾表現であるものが修飾部ではなく主要部に位置していることが考えられる。しかしこのような表現でも、N₂に位置する表現を具体的な Object のように解釈した場合、容認不可能とは言えないこともありうる。たとえば(81a)では、「現役」という名詞を、「現役(である人)」のように、「現役」という value をもった具体的な Object だと解釈すると、「N の N」は「プロ野球選手の中で、現役である人物」という意味になり、容認可能であると考えられる。これは「プロ野球選手という value をもった Object の集合における、現役という value をもった Object」を意味する。しかしこのような解釈をした場合、SR 式は「x_n の x_n」となるため、やはり「x_n の p_n」という表現は容認不可能であるといえる。

4.4.3. e_n の p_n

(79b)で示される「e_n の p_n」のパターンも容認不可能な表現となる。

(82) e_n の p_n

a. ??オリンピック₁ の 史上最高₂

e₁:類=オリンピック ,

(82a)では、「ある具体的な Object であるオリンピックが、史上最高という value をもっている」と解釈することはできず、「e_n の p_n」であらわされる「史上最高という value をもった Object であるオリンピック」という意味にはならない。しかし、「史上最高」が「史上最高(のもの)」などをあらかずと解釈できる場合、「??オリンピックの史上最高」は「オリンピックの中で、史上最高のもの」となり、容認可能になると考えられる。しかしこのような場合も、N₂に相当する「史上最高」という名詞は e_n型であらわされると考えられ、「e_n の p_n」にはならないと考える。(82b)でも、「??会議の明日」は「日時という attribute に関して、明日という value をもっている会議」とは考えにくく、「明日行われる会議」という意味には解釈できない。したがって、「e_n の p_n」表現もいずれも容認不可能となるといえる。

4.4.4. p_n の p_n

「p_n の p_n」の表現もすべて容認不可能となると考えられる。

(83) p_n の p_n

a. ??最高₁ の 世界一₂

p₁:____()=最高 ,
p₂:____()=世界一 | p₁

b. ??独自₁ の 特大₂

p₁:____()=独自 ,
p₂:大きさ()=特大 | p₁

(83)の例を見るとわかるように、「p_n の p_n」という表現は非常に不自然なものとなる。N₂に相当する表現が p_n型であることに加え、「N の N」における両方の要素が「ある Object が~という value をもっていること」をあらわす p_n型の修飾表現であることもその理由として考えられる。

ここまで見た(79)~(83)のような「N の p_n」の例を見るとわかるように、やはり p_n型が主要部である N₂に出てくる表現はいずれも容認不可能となっている。このことから、3章で示した「主要部 N₂の位置に p_n型の表現はあらわれない」という(36)を主張することができる。

5. さまざまなパターンの「NのN」の考察

5.1. 容認不可能となる「NのN」： $N_1=v_n$ の場合

4.1節で述べたように、「 N_1 の N_2 」において N_1 に v_n がくる表現はいずれも容認不可能となる。そのため、以下のような「 v_n のN」の表現はいずれも容認不可能となる。

- (84) a. ??厚さ₁ の 本₂ v_1 :厚さ() , x_2 :類=本 | v_1
b. ??結果₁ の 決勝戦₂ v_1 :結果() , e_2 :類=決勝戦 | v_1
c. ??震度₁ の 震源₂ v_1 :震度() , v_2 :震源() | v_1

(84)はどれも、密接な関係をもった2つのNによる「NのN」であるが、 v_n 型の表現が修飾部 N_1 に存在しているために容認不可能となる。

5.2. 容認不可能となる「NのN」： $N_2=p_n$ の場合

4.4節で述べたように、「 N_1 の N_2 」において N_2 が p_n 型の表現となる場合には容認不可能となる。例は4.4節を参照。

5.3. 容認可能となる「NのN」

ここからは5.1節、5.2節で示した例以外の、容認可能となる「NのN」のパターンについて考察していく。

5.3.1. x_n の x_n

「 x_n の x_n 」のパターンは「NのN」の特徴をよくあらわしている表現であるといえる。つまり「 x_n の x_n 」は2つの異なるObject同士の修飾関係による「NのN」であるが、その関係性がどのようなものであるかは具体的には言及されおらず、意味を受け取る側がさまざまな解釈の可能性の中からコンテキストにしたがってもっとも適切なものを選択するのである。したがって一見関係なさそうな名詞の組み合わせの場合にも、自由に関係性を設定することで容認可能となるのである。

- (85) a. 太郎₁ の 次郎₂ x_1 :名称=太郎 , x_2 :名称=次郎 | x_1
b. ネコ₁ の 車₂ x_1 :類=ネコ , x_2 :類=車 | x_1
c. タケシ₁ の 携帯電話₂ x_1 :名称=タケシ ,
 x_2 :類=携帯電話 | x_1
d. 金メダル₁ の 選手₂ x_1 :類=金メダル , x_2 :類=選手 | x_1

- e. 明太子₁ の 福岡₂ x_1 :類=明太子 , x_2 :名称=福岡 | x_1

(85a)では「太郎」と「次郎」という2つのObjectについて、「太郎にとって、もっとも良き理解者である次郎」、「太郎の担当する顧客である次郎」、「太郎が飼っているペットの次郎」など、コンテキストによってさまざまな解釈が可能であり、(85b)「ネコの車」のような2つの名詞の関係性がわかりづらいようなパターンでも、「ネコが描かれている車」や「ドライバーが常にペットのネコを乗せている車」など、意味の通じる表現として解釈することができるのである。

5.3.2. x_n の e_n

「 x_n の e_n 」のパターンは e_n が項をとる場合ととらない場合が考えられる。 e_n が項をとらない場合、これまで見てきた2つのObjectによる「NのN」のように、 x_n と e_n という2つのObjectが何らかのかたちで関係をもっていることが意味される。また e_n が項をとる名詞である場合には、 N_1 である x_n は e_n に対する項となり、ThemeやAgentとしての役割を果たす。いずれの場合にも「 x_n の e_n 」の表現自体は容認される。

(86) x_n の e_n (e_n が項をとらない場合)

- a. 花子₁ の 運動会₂ x_1 :名称=花子 , e_2 :類=運動会 | x_1
b. メッシ₁ の 大会₂ x_1 :名称=メッシ , e_2 :類=大会 | x_1

(87) x_n の e_n (e_n が項をとる場合)

- a. 太郎₁ の 発表₂ x_1 :名称=太郎 ,
 e_2 :類=発表 , Agent= x_1 | x_1
b. ジョン₁ の 散歩₂ x_1 :名称=ジョン ,
 e_2 :類=散歩 , Agent= x_1 | x_1
c. 洗濯物₁ の 落下₂ x_1 :類=洗濯物 ,
 e_2 :類=落下 , Theme= x_1 | x_1
d. 野鳥₁ の 観察₂ x_1 :類=野鳥 ,
 e_2 :類=観察 , Theme= x_1 | x_1
e. 映画₁ の 製作₂ x_1 :類=映画 ,
 e_2 :類=製作 , Theme= x_1 | x_1

(86)の例においては、 e_n の名詞は項をとらないと考えられる。(86a)では「花子」と「運動会」という2つのObjectの間に何らかの関係があることが示され、意味解釈としては「花子が活躍した運動会」や「(三姉妹である)花子の学校で行われる運動会」などのいく

との関係による「NのN」となる。N₁にObjectとなる名詞がきて、N₂にそのObjectに関するattributeに相当する表現がくる。e_nが項をとるタイプの名詞である場合にもこのパターンは変わらず、意味解釈も可能な表現となる。

- (92) a. ロンドンオリンピック₁ の 開催地₂ e₁:名称=ロンドンオリンピック ,
v₂:開催地(e₁)|e₁
b. 大会₁ の 開催日₂ e₁:類=大会 ,
v₂:開催日(e₁)|e₁
c. 発表₁ の 順番₂ e₁:類=発表 , Theme=____ , Agent=____
v₂:順番(e₁)|e₁
d. 隠蔽₁ の 方法₂ e₁:類=隠蔽 , Theme=____ , Agent=____
v₂:方法(e₁)|e₁

(92a)は、e_nである「ロンドンオリンピック」というObjectと、「日程」「種目数」などの多数のattributeのうちの「開催地」というattributeとの関係からなっている。同様に(92b)では、「大会」というObjectと、「開催日」というattributeによる「NのN」となっている。また(92d)のようにe_nが項をとる場合でも、「隠蔽」というコトをあらわすObjectであるe_nと、そのattributeに相当する「方法」というv_nの名詞によって同様の「NのN」がつくられる。

5.3.7. p_nのx_n

p_n型のSR式は、「あるObjectのあるattributeがそのようなvalueをもっていること」をあらわすものであり、「p_nのx_n」の例は、x_n型のSR式であらわされる具体的なモノのObjectが、p_nで示されるvalueをもっていることをあらわしている。このような例はいずれも容認可能となる。

- (93) p_nのx_n
a. 現役₁ の プロ野球選手₂ p₁:類(x₂)=現役 ,
x₂:類=プロ野球選手 | p₁
b. 犯人₁ の 少年₂ p₁:類(x₂)=犯人² , x₂:類=少年 | p₁
c. 最先端₁ の 機械₂ p₁:____(x₂)=最先端 ,
x₂:類=機械 | p₁

(93a)は「プロ野球選手」というx_n型のSRであらわされる具体的な人物が「現役」であるというvalueをもっていること、そして(93c)は、ある「機械」というObjectが何らかのattributeについて、「最先端」というvalueをもっていることを示している。いずれの例もついても容認可能となっている。

5.3.8. p_nのe_n

「p_nのe_n」の表現も、基本的にp_nがe_nであらわされるObjectのもっているvalueについて記述しているものであり、容認可能な表現となる。また「p_nのe_n」の表現は、e_nが項をとる場合には、例外的にp_nがattributeに相当する表現になると考えられる。しかしこのような場合にも、「p_nのe_n」の表現は意味が通じる容認可能なものとなる。

(94) p_nのe_n (e_nが項をとらない場合)

- a. 世界最大₁ の 大会₂ p₁:____(e₂)=世界最大 ,
e₂:類=大会 | p₁
b. 今朝₁ の 会議₂ p₁:時間(e₂)=今朝 , e₂:類=会議 | p₁
c. 過去最大₁ の 地震₂ p₁:____(e₂)=過去最大 ,
e₂:類=地震 | p₁

(94)の「p_nのe_n」は(93)と同様に、コトをあらわすObjectであるe_nが、p_nによってあらわされるvalueをもつことを意味している。したがって(94a)は、ある「大会」というコトが何らかのattributeについて「世界最大」というvalueをもっていることを意味していると解釈できる。

(95) p_nのe_n (e_nが項をとる場合)

- a. 値段₁ の 見直し₂ p₁:値段(O₁₂)=X ,
e₂:類=見直し ,
Theme=p₁ , Agent=____ | p₁
b. 長さ₁ の 計測₂ p₁:長さ(O₅₁)=X ,
e₂:類=計測 ,
Theme=p₁ , Agent=____ | p₁
c. 中身₁ の 確認₂ p₁:中身(O₇₅₈)=X ,
e₂:類=確認 ,
Theme=p₁ , Agent=____ | p₁

² 「犯人」という名詞はv_n型の表現にもp_n型の表現にもなりうる。(93b)の場合は、「少年」という具体的なObjectがもつvalueとしての「犯人」であるため、p_n型の表現として考えられる。

次に、(95)の「 p_n の e_n 」は e_n が項をとると考えられる場合であるが、このような例における p_n は「ある Object が、 p_n で示される attribute について～という value」をもっていることを意味すると考えられる。それぞれの例における X は、変項として特定の値を示すと考える。(95a)で「値段」という p_n は、「ある具体的な Object である O_{12} が値段という attribute について、X 円という value をもっていること」を示しており、 e_n の「見直し」は、この「 O_{12} の値段が X 円であること」を「見直し」するのだと解釈できる。同様に(95c)は、ある具体的な Object である O_{758} の値を指示する「中身」（例えば「財布」のような具体的なモノ）についてを「確認」するのではなく、「ある O_{758} が中身という attribute について、X という value をもっていること」、すなわち「 O_{758} の中身が X であること」を「確認」という解釈が適切だと考えられる。このような表現の場合にだけは、 N_1 に位置する p_n が attribute に相当する場合だと考えるが、この場合であっても「 p_n の e_n 」自体は容認可能となる。

5.3.9. p_n の v_n

「 p_n の v_n 」の表現は 4.2.節で示したように、 p_n の SR 式における attribute 部分が空所の場合、 v_n であらわされる attribute が p_n の空所を埋めると考えられる。このような表現は、1つのまとまった p_n 型の修飾表現として Object を修飾する機能をもつ。

(96) p_n の v_n

- | | |
|--|--|
| a. 最新 ₁ の 機能 ₂ | p_1 :____()=最新 , v_2 :機能() p_1
⇒ p_n :機能()=最新 |
| b. 最大 ₁ の 面積 ₂ | p_1 :____()=最大 , v_2 :面積() p_1
⇒ p_n :面積()=最大 |
| c. クラスー ₁ の 身長 ₂ | p_1 :____()=クラスー ,
v_2 :身長() p_1
⇒ p_n :身長()=クラスー |

(96a)は、value に相当する p_n 型の「最新」という表現と、attribute に相当する v_n 型の「機能」という表現によって、「ある Object の機能が最新である」という1つの p_n 型の表現となっている。また(96c)は、「クラスー」という value に相当する p_n 型の表現と、「身長」という attribute に相当する v_n 型の表現によって、「ある Object の身長がクラスーである」という1つの p_n 型の表現が逆算される。

このような考察の結果から、(35)と(36)のパターン以外は容認可能となるということが主張できる。

6. まとめ

本論文では、一見直接は関係が無いような2つの名詞によって作られるなど、名詞の組み合わせや解釈の自由度が非常に高い「NのN」という表現の中にも、必ず容認不可能となる例があることに着目した。「NのN」という表現については先行研究においても数多く考察が行われてきたが、それらは「の」の意味による分類などが中心であり、また、「NのN」ではあらゆる表現が可能となることを示しており、本論文で議論したような容認不可能となるパターンの分析などは行われていない。したがって本論文では、非常に自由度の高い「NのN」という表現において存在する容認不可能な例という、明白な疑問に対して考察を行った。

そのような容認不可能となる例を上山 (2011, 印刷中) で提案される linguistic SR によって分析したところ、それらはいずれも「attribute の Object」という名詞の関係によって構成される「 v_n のN」という形、そして「Nの p_n 」という形の表現であることがわかった。そこから以下のことを主張する。

- (35) 「 N_1 の N_2 」において、修飾部 N_1 の位置に attribute に相当する v_n 型の表現はあらわれない。
- (36) 「 N_1 の N_2 」において、主要部 N_2 の位置に p_n 型の表現はあらわれない。

また、(35)のように「 v_n のN」という形であらわされる容認不可能な例は、「 v_n のN」の左側にさらなる修飾表現を加えることで容認可能となることもわかった。これは修飾表現を加えたことで、表現の形が「 v_n のN」から「 p_n のN」に変わったことが原因であるとされる。本論文では、このような p_n 型と v_n 型の表現の修飾関係の分析において、上山 (2011, 印刷中) では定義されていなかった新たな abduction の式である(37)を提案する。

(37) 推論規則：attribute の認定

$$p_n : \text{Attribute}_j (o_i) = \text{Value}_k$$

$$\Rightarrow p_m : \text{____} (o_i) = \text{Value}_k$$

$$v_n : \text{Attribute}_j (o_i) \mid p_m$$

(37)の存在によって、 p_n 型に相当する表現と v_n 型に相当する表現の Merge による構築物を1つの p_n 型と考えることができ、そのことによって、容認不可能であった表現が容認可能

となる現象についても説明することができる。またこの分析が示すように、「 v_n のN」は容認不可能であり、それが「 p_n のN」になると容認可能となるという事実は、(35)の主張を改めて示すことにもつながる。そして、さまざまな名詞を組み合わせて16通りの「NのN」のパターンについて考察したところ、表現の容認性について以下のような結果になることがわかった。

(97) 表1

	N2	v_n	x_n	e_n	p_n
N1					
v_n		×	×	×	×
x_n		○	○	○	×
e_n		○	○	○	×
p_n		○	○	○	×

(97)の表を見るとわかるように、「 N_1 の N_2 」という表現において、 N_1 の位置に v_n 型の表現が現れる例はいずれも容認不可能となっており、また、 N_2 の位置に p_n 型の表現が現れる例が容認不可能となっていることも明らかである。このことから、(35)の「 N_1 の N_2 において、修飾部 N_1 の位置に attribute に相当する v_n 型の表現はあらわれない」という主張と、(36)の「主要部 N_2 の位置に p_n 型の表現はあらわれない。」という主張以外の組み合わせは、いずれも容認可能となることが非常によくわかる。

(97)からも明らかのように、さまざまな名詞の組み合わせが存在し、あらゆる表現が容認可能だと考えられていた「NのN」の中にも、確実に容認不可能となる表現は存在し、またそこには(35)、(36)といった明らかな規則性が存在するのである。本論文における考察によって、「NのN」に存在する制約が明らかになった。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 pp.30-31. スリーエーネットワーク,
- 上山あゆみ (2011) 「統語論に基づく新しい意味理論の提案」、人工知能学会研究会資料 SIG-SLUD-B101, pp.35-40.
- 上山あゆみ (印刷中) 「特定事物への指示と語彙タイプ」、『文学研究』第109輯.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』 pp.159-160. くろしお出版
- 西山佑司 (1993) 「「 NP_1 の NP_2 」と“ NP_2 of NP_1 ”」 『日本語学』12: 65-71.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』 ひつじ書房.